午前は池袋、午後は大宮で三時間ずつ講義。移動時間は大急ぎ

二校同時受講法

日本語教育能力検定試験に合格 野中真茶子さん

主婦に人気の日本語教育能力検定試験に合格した野中真茶子さん。資格スクール大手の「ヒューマンアカデミー」に通い、わずか半年で合格をものにした。その秘訣は圧倒的な受講時間の長さにある。

家族と過ごす週末や平日の夜は家にいたいと考え、受講は必然的に平日の昼間になった。野中さんの自宅から近い大宮校では午後しか講座がなかったが、同校ではどこの校舎でも通っていいという制度があったため、午前中は池袋校まで足を延ばし、午後は大宮校で受講するという強行日程で、月・水・金に通学することにしたのだ。

「午前と午後それぞれ三時間、講義があり、その間の一時間で移動と食事をするというものでした。試験まで日数がなかったため、二校を利用して短期間で集中的に勉強しようと思ったんです」

スクールに通い詰めたのはもう一つの理由がある。日本語教師養成の履修システムには「四二〇時間カリキュラム」という目安があり、養成講座を四二〇時間受講していれば、それ自体が履歴書に書ける経歴として認められるからだ。

週に三日の通学、一日は仕事をしていたので、スケジュール管理は大変だった。そこでカレンダーをフル活用。家族の予定を書き込んでいるカレンダーに、通学の日や自主的な学習計画も書き込んだ。試験までに出題範囲に目を通し、ポイントを復習する予定も組んだ。

左／野中さんのきれいに書かれた暗記ノート。普段何気なく使い分けている「文法」を論理的に理解するのは難しかったそう。一発合格にこだわったのは、明日香ちゃんの年齢を考慮して。学校選びに融通がきく中学生のうちに帰国したいため、今回しかないと背水の陣で挑んだ。

「携帯電話にやるべきことをメモしていたんですが、携帯は見ようと思わないと見ない。目に見えるところにあるカレンダーのほうが役立ちました。計画通りにいくときばかりではありませんが、やり残した分は週末に挽回しました」

家では当時小学六年生だった娘の明日香ちゃんが宿題をする時間に合わせて自身も復習を行ったほか、台所で家事をしながら明日香ちゃんに問題集を読み上げてもらい、それに答えるなど親子で一緒に勉強もした。結果的に「親が勉強している姿を子供に見せることも教育になるとわかった」という。

実は野中さん、JICAの青年海外協力隊員としてブラジルに赴任、日本語学校の幼児クラスの教諭をしていた経験がある。

「ブラジルで現地の人と結婚、出産をして、日本に戻ってきましたが、四〇歳を迎えたのを機に再び家族全員でブラジルへ行きたいと思うようになりました。ところがチャレンジしたJICAの試験は不合格。ならば日本語教育能力検定試験に合格してキャリアとして認めてもらおう、と考えたのです」

この七月から二年間、ブラジルで日本語教師の職に就くことになっている。ブラジルで日本語を教えるという大きな夢が、家族全員の意向だったことが、二つの学校に通うハードな勉強法を支えた秘訣なのかもしれない。

野中さんの1日（学校に通う日）

6:30	起床
8:30	外出
9:40	池袋校に到着
	3H 受講
12:40	授業終了後、大宮校へ移動
14:00	大宮校に到着
	3H 受講
17:10	授業終了
18:00	帰宅して、夕食作りなど
20:00	
	0.5H 娘と一緒に勉強
20:30	
22:00	
	1H 講座の復習
23:00	
24:00	就寝

埼玉県で夫と長女との3人暮らし。41歳。講義の合間の80分で移動と昼食をするのが大変だったとか。昼食は買ったおにぎりを頬張って済ませたりしていた。